

石神先輩のお兄さんから借りた黒いピカピカのBMWを、無免許バリバリの大河原が軽快に山中を走らせる。曲がりくねった一本道、隙間無く広がる木立、たまに現れるガードレールや標識がむしろ珍しいぐらいの、ちっとも補整されていない砂利道、砂利道、砂利道……そんな風景がかれこれ一時間以上も続き、時刻は既に七時を過ぎ、生い茂る木々から覗く太陽は狂ったようなオレンジ色に染まっていた。

その間、後部座席に座る僕（春日陸）と助手席の日野啓一、そして大河原先輩の三人は、ほとんど会話らしい会話もせず、無言のままに車内を過ごしていた。ただ、少なくとも僕と先輩の胸中は、啓一さんの乗り物酔いに対する心配の一点のみであったと僕は確信している。出発の前後三十分はいつも通り……いや、普段の寡黙な彼を考えるとむしろ高いぐらいのテンションで談笑していたはずが、山中のカーブを一つ、二つと曲る度に口数が減っていく、顔色も見る見るうちに悪くなっていた。今や彼はホラー映画に出てくる幽霊のメイクを施したように青白く、ぐったりと項垂れ、何度も深呼吸をし、たまに大きく嘔吐いては僕たちを冷や冷やさせているのだった。

「……啓一くん、大丈夫？」
僕は訊ねた。

「……バイオリズムの巡りが悪かった」
彼はさっきからこの「バイオリズム」という言葉を連呼し、その「バイオリズム」の不調に対して本気で悔しがっているみたいだった。

「日野、マジに無理すんなよ。止めた方が良いか？どうせもうサロンは始まっているし、少しぐらい遅れても同じだろ」

大河原先輩はそう言うと、ハンドルを握りながら慣れた動作でポケットからタバコを一本取り出し、ライターで火をつけた。

「俺は良いから、さっさと走らせてくれ」

啓一くんは半ばヤケクソ気味にぼそぼそと呟いた。

「……いや、あのな、これは、お前が良いんだったら、とか、そういう話じゃねえんだよ。今てめえが乗っているのは賢司の兄貴の車、それもウン百万円のBMWなんだ。駅前で拾ったタクシージャなくて、ゲロまみれにするには少々勿体ない外国製の高級自動車なんだよ。俺にも面子ってもんがあるんだから、その辺きっちり考えてもの言ってくれよ」

大河原先輩が煙を吐き出し、車内にタバコの臭いが充満する。これ以上啓一くんの酔い

を悪化させてはいけないと思い、僕は慌てて窓を開けた。

「……何か話を」

啓一くんはほとんど聞き取れないぐらい、小さく籠もった声で呟いた。

「なんだって？」

大河原先輩が訊き返す。

「気の紛れる話ですって」

僕が先輩に啓一くんの言葉を伝える。

「オッケー。じゃあ、サロン会場の持ち主について話しておくぜ」

「吸血鬼、じゃないんですか？」

「吸血鬼、はサークルのリーダーさ。ま、俺からするとありや、吸血鬼、ってより、アラレちゃん、だったけどな」

大河原先輩の言葉に僕たちは笑った。

「屋敷の持ち主はカミリイ・ヘルンバインってオーストリア系イルランド人の娘で、日本に住んでまだ三年足らずだそうだ。屋敷はそのカミリイって奴の爺さんが、戦争直後に日本人の知り合いから趣味半分で買い取ったものらしくて、まあ、要するに石神級の大金持ちのお嬢さんってわけさ」

「どんな方なんですか？」

「見たことは無いが、黙ってりやビスク・ドールみたいだって。中身はとにかく無邪気らしいぜ」

「無邪気か……無邪気って言っても、どんな無邪気だろう？例えば、藤枝も無邪気だし、先輩だって無邪気じゃないですか」

「今の俺は深刻そのものだったっの。まあ、人づてに聞いた印象なんてアテにならねえし、実際会ってみない事には何も分かりやしねえよ。ただ、どれだけ無邪気だっつっても、ゲロまみれで玄関跨れて怒らないって事は無いと思うんだな。なあ、日野？」

啓一くんは聞いているのか聞いてないのか、目をつむり、大きな呼吸を繰り返していた。波風の立たない水面のように平らな精神状態を保とうと集中しているのだろう。

――事の発端は先日、灰色ケ原は灰色ケ原駅前なんかカフエ灰色ケ原店。

僕は、友人の日野啓一、鷹取先輩、および大河原先輩の三人と、どうしようもなくユルい、代わり映えのしない休みの一日を過ごしていた。

梅雨の明けきらない鬱陶しい湿気と熱気を避けるため、本日のコーヒー、一杯でかれこれ2時間近くもテーブルにしがみつき、その間交わされた会話の一つでも四人の誰かが覚えているとは到底思えない、本当に無意味で、無益で、とりとめの無い時間。

とはいえ、僕自身は別にこういうのは嫌いじゃなかったし、啓一くんにしたっていつもの通り「どうでもいい」んだろうけど、超合理主義人間である鷹取先輩にとってこの無益

な時間は耐え難い苦痛に他ならず、ふとした拍子に話を切り上げてお暇しようとする彼女を、大河原先輩が必死に引き留めようとするのだった。

「こないだ吸血鬼に会ったんだぜ」

話題らしい話題も出尽くして、なんとなく疲れた沈黙が一分かそこら続いた後、大河原先輩が思い出したようにそう言った。

冗談にしてもあまりに突拍子もない先輩の言葉に、鷹取先輩はうんざりしながら項垂れる。啓一くんは頬杖をついて話し手の顔を見ていたが、その顔つきは思いのほか興味を引かれていた様子だった。

先輩は言葉が続けた。

「俺のダチにエリカってゴス趣味のメンヘルちゃんがいる、そいつの参加してるサークルとやらのリーダーが『自分は吸血鬼の血族だ』なんて抜かしやがるんだよ。まあ、イカれた奴だなあととは思ったけど、話を聞いてると面白そうだから一回会ってみる事にしたんだ。面白い奴に会うのは嫌いじゃないし、吸血鬼とは前から一度話をしてみたかったしな」

鷹取先輩は顔を上げて窓の外を見た。青白い肌、ナイフみたいに透き通った目つき、真っ黒に流れる艶やかな髪の毛……吸血鬼というなら、この人こそまさにそれっぽい。

大河原先輩は言葉が続ける。

「で、そのエリカの取り付けで件の吸血鬼さんとやらに会う事になってよ。どんな蠟人形みてえな格好してくるのかと期待したら、これまたすっげえ普通なの。真っ黒の三つ編みに、予備校生みてえな格好してて、丸い銀縁眼鏡にそばかすまで用意してよ。吸血鬼がそばかすだぜ？しかも、お日様のさんさん照りつける日中だ。俺はてっきりクソ暑い黒コートに、真っ黒の日傘かなんかさして来るもんだと思いきや……なんつーか、これだけ開き直られると逆に説得力があったな。連続殺人鬼が実は至って普通の一般人っていう、アレさ」

「そんな普通の一般人に訊けたんですか？」

「何を？」

「吸血鬼ですか？って」

僕の質問に、大河原先輩は首を横に振った。

「訊けない事も無いが、いきなり『あなたが吸血鬼ですか？』ってのも面白くねえだろ。だから、とりあえず普通の会話を始めたんだよ」

「普通の会話って？」

「普通の会話さ。初対面の人間が当たり障りの無いところから共通の話題を探していく、クソつまんねえ普通の会話。でもよ、ここでも俺は裏切られたぜ。この吸血鬼さんは、見た目通りの、至って普通の……いや、それどころか、むしろけっこう頭の良い奴だったんだ。会話の端々から切れ者ぐあいがあったよ。冗談も上手えしな。頭の良し悪しは、冗談の良し悪しさ」

僕はまたちらっと鷹取先輩の方を見た。この人は切れ者だけど、冗談が上手いような印

象は無い。むしろ、そう言う意味では山田さんとかの方が頭が良いんだらうか？あるいは、石神先輩？啓一くんが真顔で言う言葉の数々は、あれは冗談のつもりで言っているのだろうか？

「とにかく、そんな感じでその吸血鬼さんと話してるとよ、何かの話題からふとエリカ達のサークルの話題に移ったんだ」

先輩は言葉が続けた。

「『トランシルヴァニア』ってサークルらしいんだけど、メンバーの一人が大金持ちで、城みてえにだけえ屋敷に住んでるんだと。ほら、この町の北東にある山さ。あの山の裏側に、どこでかい屋敷があるらしいんだ。その屋敷で月に一度サロンを開いて、黒ずくめのファッションとか、黒ずくめの映画とか、魔術とか、この世の痛みとか、闇とか、深淵とか、そういうステキなゴシック話に精を出してるってわけさ」

「ゴシックって何だ？」

啓一くんの質問に、大河原先輩は目を点にした。

「……改めて訊かれると困っちゃうな。黒くてフリフリ？」

「それ、ゴスロリじゃないですか？元々の『ゴシック』は建築様式の一つですよ？ゴスロリのゴスとゴシック建築と、どう関係があるんですか？」

僕が言うと、大河原先輩は「あー」とか「んー」とか、よく分からない生返事をするばかりで、もう一つピンと来ない様子だった。

啓一くんが鷹取先輩の方に身を寄せて何か囁いたが、こちらからは聞き取れなかったし、鷹取先輩は窓の外を見たまま、相変わらず微動だにしない。

「鷹取、そろそろ解答を教えてくださいよ。そんな退屈そうにしねえでよ」

鷹取先輩はちらっと大河原先輩の方を見て、激甘コーヒーを一口喉に流しこむと、涙をすすり、小さいため息をつき、ゆっくりと椅子に座り直した。

「……そうね」

鷹取先輩が話を始め、全員の視線が集まる。

「ゴシックって言うのは、中世ヨーロッパの古い建築様式の事で、文明の光の当たっていない暗黒時代の文化なの。暗くて、怖くて、内省的で、宗教的で、耽美で、荘厳で……その辺の諸要素がああ言う人たちの好みや考え方に合ってるんじゃないかしら。薄汚れて生々しい、現実、に比べて、過去、はいつでも美しく見えるものよ」

「今を生きない連中の集まりってか？ちよっと皮肉っぽいぜ鷹取先生」

大河原先輩の言葉を無視して、鷹取先輩は続ける。

「……あの人たちはいつでも世の中に対してアンチな姿勢だし、そこには自嘲や自己嫌悪も含まれてるわ。それを隠そうとしない分、正直だし、思い切りがあるし、なにより可愛いものじゃない」

「フォローしつつ、バカにしてる？」

「……帰っても良いかしら？」

大河原先輩は「まあまあまあ」と両手を下げて、席を立ちかけた鷹取先輩を制止した。「面白半分には首を突っ込む方がバカにしてるじゃない。ごっこ遊びとは言え、本人たちは真剣なのよ」

珍しく鷹取先輩がむっとして答えた。――僕はこの人のこういう姿を見たとき、彼女が美人、なんかじゃなくて、可愛い人、なんだと、つくづく思うのだった。

「いや、まあ、聞けよ。お前さんのゴシック評はどうでもいいんだ。実はな、その吸血鬼さんがどうも俺の事を気に入ってくれたらしくて、光栄にもそのサークルのサロンとやらに呼ばれちゃまったんだよ。でも俺一人じゃ心細いし、出来れば、お前らも来ないかなーって」大河原先輩が言うと、僕たちは……特に鷹取先輩はびっくりして、彼の方を見た。

「どうだ、日野？」

「行く」

啓一くんは即答した。

「啓一くん……！」

鷹取先輩は叱るように嘯き、きつと啓一くんの方を睨んだが、啓一くんはどこ吹く風、既に氷だけになったカップの中身をストローで啜っていた。

「春日も来るよな？」

僕は少し考えてから、いいですよ、と言った。

「鷹取も……」

「バカバカしい……！」

鷹取先輩は今度こそ本当に席を立ち上がると、そのままずかずかと一直線に店の出入り口に向かって、店から出て行ってしまった。

ぽつんと取り残された三人。

大河原先輩は「まあ、分かってたけどね」とかなんとか呟くと、コーヒーのおかわりを求めてぶらぶらとカウンターの方へ向かうのだった。

「……おい春日」

大河原先輩が席を立って二人っきりになって、啓一くんは僕の方に身を乗り出して訊いてきた。

「お前、どんな格好で行くつもりだ？」

「ゴスのサロンでしょ。黒スーツとか？」

「制服じゃ駄目か？」

「流石にダサすぎだよ。黒いスーツあるでしょ？葬式とかに着ていけるような……」

「持っていない」

「家に一着も？」

「いや、親父のならあるけど、勝手に持ち出す訳にもいけないし……」

「汚さなきゃ大丈夫だよ。汚すような事なんてないだろうし」

「……そうだな」

うんうん、と啓一くんは頷き、納得していた。

——そして、サークル『トランシルヴァニア』のサロン会場、カーミラ・ヘルンバインの屋敷の前。

嘔吐物まみれの黒スーツを纏う啓一くんを凄惨な形相で睨みつける大河原先輩は、やがて諦めたように左右に首を振ると、勢いよくドアノックカーを二度鳴らした。ドアノックカーは真鍮製の、アンティークなデザインのものであった。

屋敷は馬鹿でかい古風な洋館で、その古めかしきと言いつつ、真つ暗の山中と言いつつ、外装の雰囲気は申し分の無いものだった。ごっこ遊びには勿体ないセッティングである。「てめえ、どの面下げて玄関くぐるつもりだよ」

胃の底で煮えたぎる怒りを必死に堪えながら、大河原先輩がそう言った。

啓一くんは僕が貸したハンカチで少しでもゲロを拭き取ろうと苦心していたが、そこにはIDEAの王の貫禄は無い。控えめに言いつつ、ただの異臭のする高校生である。

「クソツ！ギアをニュートラルにした瞬間に吐くか、普通……？ほんの、ほんのあと少しで円満解決だったのに……なんで我慢できねえんだ、お前は！？」

「春日が悪い」

啓一くんが呟いた。

「ああ、春日も原因の一端は担ってるな」

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！僕が一体何をしたって言うんですか？」

「メキシカン・シーフードの話なんてするからだ」

「僕はそんな話した覚えありません」

「ありがとう、春日」

啓一くんは言いながら、胃液まみれのハンカチを僕に差し出した。

「い、いいよ！あげるよ、それ。もう洗っても使いたくないよ」

傷つくなあ、と啓一くんは呟いた。もちろん、嘘である。

と、その時、不意に館の両開きのドアが重々しく開き、タキシードスーツを纏った初老の紳士が顔を覗かせた。紳士は日本人ではなく白人で、礼儀正しく、厳めしい顔つきで、いかにも嘔吐物に塗れた異臭のする人間の来訪を好まない感じだった。

「どちら様でしょうか？」

紳士はあからさまに訝しんで訊ねる。

「よう、セバスチャン！あんた、ここの執事かい？」

セバスチャンは疑り深い目つきのまま、返事も頷きもしなかった。

「俺たちやあんたんとこのカミリイお嬢さんに呼ばれたもんだけど、途中でちょいとしたイレギュラーが発生してさ。悪いけど、シャワーと替えのスーツ一着を貸してくれやしねえかい？」

大河原先輩が気さくにそう言うが、セバスチャンは食い下がらなかった。

「失礼ですが、お名前を」

「大河原琢己だ。大学に通うフリしてブラブラしてる。このゲロまみれのが日野啓一、で、これが春日」

先輩がおざりな紹介をすると、セバスチャンは刺すような目つきで僕たちの顔を順番に眺めた。何かとても悪いことをしたような気分になる目つきだった。

しばらくしてセバスチャンはしぶしながらも扉を開き、僕たち三人に入場を促した。扉をくぐって屋敷に足を踏み入れた瞬間、僕はこれから起こる様々な、あまりにも常軌を逸した、一生忘れえぬであろう凄まじい体験を示唆する、妙な悪寒のようなものを背筋に感じ、思わず身震いする……

ような事は一切無くて、ただただゲロまみれの友人と初対面の相手の家を訪問することを深く恥じ入り、こんな事なら無理にでも鷹取先輩についできてもらっていればなあ、きつと何かの解決策を捻りだしてくれたんだらうなあ、なんて暢気に考えていたのだった。——今思えば、彼のこの、バイオリズムの巡りの悪さ、こそ、これからの不幸な体験の前兆、あるいは渋川剛気的な予感だったのかもしれない。

とにかく、出足としてはまさに最悪級の出足で、僕たちは、吸血鬼たち、の巣くう屋敷へと足を踏み入れたのだった。

イギリスの田舎に佇む幽霊屋敷と言った外観もさながら、中は中でゴシックと称するに相応しいホラー映画のセット顔負けの陰鬱な内装だった。入り口の通路には腰ぐらいの高さまである柱が左右四本ずつ立ち並び、その上にそれぞれ蠟燭台が置かれている。絨毯は黒字にオレンジ色のひまわりのような模様が規則的に描かれていて、壁には真っ赤なカーテンがかけられている。通路の突き当たりには大きな両開きの木戸に、大きな十字架のレリーフがあしらわれていた。通路の途中、左右にやはり十字架の浮き彫りのある片開きの木戸があり、啓一くんだけがセバスチャンに連れられてそちらへ消えていった。僕と大河原先輩はセバスチャンの言葉に従い、正面の扉へと進んでいくのだった。

扉の向こうは館の半分近くを占めるであろう途方もなく広いホールだった。僕たちが姿を現すと、ホール中央に置かれた円卓を囲んで座る十人余りの女の子達が一斉にこちらを振り向いた。もちろん、その内の誰もが腰にコルセットを巻き、黒いフリフリのドレスを着こみ、白いファンデーションに真っ黒なアイシャドーを塗りたくっていた。ヘツド・ドレスを着用した者、モノボーダーの靴下、赤や紫の口紅……細かな装飾は違っていたが、まさしくゴシック・アンド・ロリータの名に恥じぬ、ただならぬ暗黒のオーラを放つ少女達の集まりであった。

……しかし、そんな黒い少女達の中に、更に異質な人間が二人いるのに、僕は気づいた。一人は目が眩むような本物のブロンド髪、軽やかな立て巻きロールに、鋭い、吸い込まれるような青い瞳。なるほど、ビスクロールか……と、僕は一人納得した。この白人少女こそ、この馬鹿げた幽霊屋敷の持ち主、カミリィ・ヘルンバイン嬢に違いない。本場西洋人のゴスロリファッションがこれほどまで魔力的な魅力を持っているなんて、僕は想像もしなかった。可愛いとか惚れるとかそういうのを超越してしまう、背筋の凍るような美しさ。性の感情なんてでんで寄せ付けない、完成された幻想性。――さっきまでゲロを吐くだの吐かないだので騒いでいた僕たち自身、なんとマヌケで低俗な事だろう。

「いらっしやいませ、黒山羊さんたち！ドーズお掛けになって！」

白人少女――カミリィが、微妙な訛りで僕たちに叫んだ。その完全な外見と訛りのどんくささのギャップに、僕は不意を突かれた。

「アラレちゃんの姿が見えねえな？」

大河原先輩はそう言いながら、少しも怖じ気づくこともなく、ずかずかと円卓の方へと進み出した。僕はと言えば、館の内装や黒い少女たち、そしてカミリィの雰囲気飲まれてすっかり萎縮してしまい、先輩の後を金魚の糞のようについて行くことしかできなかった。

「アラレ……？」

カミリイが青い瞳をくりくりさせて、不思議そうな顔をした。

「吸血鬼さんだよ」

「オー。ウシオのことデスカ？」

「そうとも言えないな」

くすくす、と笑い声が上がって、僕は恥ずかしさに顔中が火照るのを感じたが、大河原先輩は相変わらずの自信満々の笑みで全く動じていない。

「琢己さん。潮さんは奥の部屋で今日の催しの準備をなさってるわ。それと……そんな呼び方は止して」

「ようエリカ。何の話だい？」

「アラレちゃんだなんて……あの人、プライド高いんだから……」

エリカと呼ばれた少女は、大河原先輩の目を見たり、かと思えば逸らしたり、喋っている間中せわしなく視線を動かしていた。おまけに、何となく卑屈な、それでいてプライドの高そうな顔つきと仕草。他人とのコミュニケーションが苦手なのは一目で明らかだった。——ここにはそんな少女ばかり集まっているのだろうか？

「とりあえず、自己紹介なさっては如何？」

黒い、少し大きすぎるヘッドドレスをつけた、いかにも我の強そうな傲慢な目つきをした少女が、敵意を隠さず、挑みかかるように僕たちにそう言った。

もっとも、敵意を隠していないのは彼女だけではない。大河原先輩の既知の友人であるエリカとカミリイを除く他の少女たちは、こぞって僕たちの来訪を歓迎していない様子だった。こんな悉くアウェイな状況で自己紹介をしろというのも、なかなか難しい要求だな、と僕は思った。

……いや、もう一人。エリカとカミリイ以外に、僕たちに敵意を持っていないと思われる女の子がもう一人いる。前述した黒ドレスに混じった異質な二人、カミリイと、そしてもう一人がこの少女だ。

頭から首、肩から指先まで、ぐるぐると白い包帯を巻かれ（それも、機能的にではなく、あくまでファッションの一環として）、片眼には眼帯をし、包帯の隙間から覗く表情は……とらえどころが無いというか、なんとというか。とは言え決して無表情という訳でもなく、もっと何か浮ついた感じの、人が本当の無意識の時に見せるそれに似ていた。例えば授業中なんか、何気ない発想がふわふわと取り止めなく回っていく時の表情に近いかも知れない。この少女の瞳には意志的なものが一切感じられない上に、さっきから微動だにしないので、カミリイがビスクドールっぽい美少女なら、この包帯少女はある種、本物のお人形に見えるのだった。

そして、何より異質なのは、この真っ黒な人々に囲まれて一層輝いて見える、白いドレスに白い包帯、白い眼帯……

「誰か上手な自己紹介の方法を教えてくださいよ」

大河原先輩の言葉。またホールに響く、くすくす笑い。

「お名前ハ？お歳ハ？」

カミリイの大げさな、間違ったアクセントの日本語。

「大河原琢己。お歳は今年で十九」

「ソチラのたまねぎくんハ？」

僕はぎくつとした。

「か、春日陸です」

「お歳ハ？」

「じゅ、十七……」

「好きな食べ物ハ？学校は楽シイ？好きな人はいる？」

「おいしい、俺より質問項目が多いぞ？」

おろおろしていた僕を大河原先輩が助けてくれたのか、あるいは本心からの妬みの言葉なのか。

「あなたは放っておいてテモ、何でも話してくれそうデスもの」

ささめき立つくすくす笑いに、大河原先輩は肩をすくめた。

「あ、あの！」

僕は気負いすぎ、つんのめりそうな勢いで言った。

「その包帯ぐるぐる巻きの人、怪我してるんですか？」

僕の質問に、黒い少女たちの表情は様々なものに変化した。微笑み、好奇心、妬み、蔑み……それも、それらは僕にというより、むしろその包帯少女に向けられているようだった。

しかし、当の包帯少女だけは、やはり微動だにしなかった。包帯ぐるぐる巻きが自分の事だと、気づいてもいない様子だった。

「、白雪、の事デスカ？」

カミリイは包帯少女を、白雪、と呼んだ。

白雪……ニックネーム？ハンドルネーム？源氏名？

「これはワタシが勝手に巻いたものデス。似合ってるでショ？」

「とても似合ってるっしやるわ、カミリイ！」

「禁忌の中に見る病的な倒錯的エロチシズム……」

「薄汚れた社会で傷ついた、純粋な心のメタファー！」

黒ロリたちが次々にカミリイに同意した。

「……社会で傷ついたトイウのは少し違いますワ、マチコさん」

カミリイが言うと、マチコと呼ばれた少女はぎよつとした

「マチルダです、カミリイ！マチコはここには居ません！マチコは人間関係という、バスティーユに囚われた、不幸で力の無い、哀れな少女の名前です。今の私はマチルダですから、お間違えなきよう！」

マチルダがそう言うと、カミリイは何とも言えない顔つきで、うんうん、と頷いた。

「……マチルダ、それは違うワ。白雪が他人に傷つけられるなんて事ありえないモノ。だって、人形の心を傷つけられる人がいるかしら？傷つけたとして、それはブツシツ的損壊以外の何物でもナイわ」

「それはその通りだわ！」

「さすがはカミリイ。仰る通りね！」

次々に肯定する黒ロリたち。

こいつらバカだな、と、大河原先輩が小声で囁いてきた。

「その……でも、勝手にミイラみたく包帯ぐるぐる巻きにされて、本人はどう思ってるんですか？」

僕は訊ねてみた。僕はこの白雪という少女が気になって仕方がないようだ。

「彼女はお人形さんデスよ、フランツ。スワニルダは平気？」

またくすくす笑い。僕には何が面白いのかよく分からなかった。

「お人形って、どういう事ですか？」

「あのね、フランツ。白雪は普通じゃない、とんでもないお白痴（バカ）さんなの。ほら、見て！」

血のように赤い口紅をつけた、意地悪そうな鼻の形の少女がそう言うのと――彼女は白雪の隣の席に座っていたのだが――すぐ隣の白雪の鼻を、ぎゅっ、と摘んだ。

すると、さつきまで焦点の定まらない表情をしていた白雪が、俄に身を強ばらせて、引きつけでも起こしたように席を立ち上がり、自分に何が起こったのかさっぱり分かっていない表情で、ぼたぼたと包帯をはためかせながらホールを走り去った。僕と大河原先輩は呆気にとられながら彼女の豹変ぶりに驚いていたが、黒ロリたちはこそぞって心の底から楽しそうに笑っているのだった。

「ご覧なさい、鼻を摘んだだけであの慌てぶり！まるで草食性の小動物ね！」

意地悪そうな鼻の少女がそう言うのと、黒ロリたちは一層楽しげに笑い声をあげた。

しかし、カミリイだけは、白雪の慌ただしい姿に笑ったというよりは、白雪の鼻を摘んだ少女がけたけたと笑い転げるを見つめながら、何かもっと得体の知れない不気味な笑みを浮かべているのだ。

「……アナタ、この間入ったばかりの方でしたワネ。お名前なんでしタっけ？」

カミリイは意地悪そうな少女に訊ねた。

「美穂ですわ。カミリイさん」

「ミホ、ミホ、ミホ。ウシオの事はドコまでご存じ？」

「一度も面識は無いのですが、なんでも、吸血鬼の血族だとか……」

今度は大河原先輩が付け、と変な笑い方をした。黒ロリたちの視線が痛い。

カミリイは気にも止めずに続けた。

「アナタ、ウシオが吸血鬼の血族で、同性愛者（レズビアン）で、どうしようも無い嗜虐趣味の持ち主って、知っテタ？」

僕は自分の耳を疑った。レズビアン？

「い、いいえ。それは……存じませんでしたわ」

美穂も驚いたのか、引きつった笑顔で心的動揺を必死に取り繕っていた。

「ウシオは白雪を愛してイルの。精神的ニモ、肉体的にモ。白雪という存在が彼女の価値観の全テなの。だから、彼女を虐げる事は彼女自身への最大のブジョクに他ならナイ……そうそう、こんな話があるワ」

カミリイは話を続けた。

「以前、このサロンにIという女の子が来ていたの。今はもう来なくなったケド……ねえ、マチルダ、アナタ、Iをぞ存じ？」

「ええ、あの貴族的自覚の無い、軽薄でいけ好かない女！」

マチルダは最もらしく憤慨して、カミリイに言った。

「Iはワタシやカミリイに優遇される白雪を妬んでいテ……ある日、凄くささやかな悪戯を白雪にしたの。ほんの少し耳に息を吹きかけるといいう、とてもちっぽけで子供ジミタ悪戯をネ」

カミリイは楽しみに続ける。

「おバカな白雪はさっきのように慌てて立ち上がると、ウシオの方へ逃げ出したワ。ウシオは白雪を優しく宥めて、静かに席を立ち、Iの方へ近づくと、やはり白雪にそうしたように優しい言葉を語りかけ、二人きりで屋敷の地下室へ降りて行つタノ」

「……何の用事でですか？」

美穂は例の引きつった笑みで訊ねた。

「その時はワタシタチにも分からなかつタワ。でも、三十分、一時間と経つても二人の戻つて来る気配が無く、ワタシは不思議に思つて様子を見に行つたノ。だって、地下室にはお爺様の集めた骨董品しか置いて無いんデスもの」

「壺とか、絵画とかですか？」

美穂の質問に、カミリイは小悪魔的な微笑を浮かべた。

「イーエ、少し違うワ。スペイン長靴はぞ存じ？ガロット、がみがみ女のくつわハ？」

「いえ、あいにく、そういった物には疎くて……」

美穂は申し訳なきように言った。

「知らないなら良いの、気にしないデ。とにかく、そう言ったステキなアンティークばかりの地下室で、ウシオは……」

と、その時。けたたましい音と共に扉を開けて二人の少女が姿を現した。あまりに乱暴な音に僕は不意を突かれ、思わず椅子の上から飛び上がりそうになった。

少女は……三つ編みにぐりぐり眼鏡、そして緑色のワンピースという、いかにも普通の、一般的な少女の格好をしていたが、この館においてはむしろその普通さが尋常じゃなかった。——彼女が大河原先輩の言っていた、吸血鬼、なのだろうとすぐに分かったが、それにしても、彼女は眼鏡以外のどこもアラレちゃん的な要素は無い。眼鏡をかけた女の子

を誰でもアラレちゃん呼ばわりするのは大河原先輩の悪い癖だと僕は思う。

そして、そんな異質な吸血鬼の後ろには、先ほど美穂に鼻をつままれてホールを飛び出した白雪が、おどおどと身を隠していた。

吸血鬼……ウシオはホールの円卓に近づくと激しく胸を上下させ、神経質な目でホールの人間を一瞥した。頭にのぼった血が今にも沸騰寸前らしい様子だった。

「誰!？」

ウシオは声を裏返らせながら、甲高い声で怒鳴った。僕は……いや、大河原先輩も、黒口りたちも、カミリイ以外の全員が体をびくつかせた。

「白雪を虐めたのは、誰!？」

再度ウシオが訊ねる。全員の視線が美穂に集まった。

「も、申し訳ありません!」

美穂は慌てて椅子を立ち上がり、しどろもどろになりながらウシオに謝った。

「その……私、虐めるなんて、そんなつもりは……白雪がどんな子かって、フランツ……この男の子に知って貰おうと思って……その、ご、ごめんなさい!ウシオさんがそんなに白雪の事を大切になさっているとは……ついぞ知りませんでした!」

ウシオはぐりぐり眼鏡の向こうから狂犬のような目つきで美穂を睨んでいたが、しばらくして呼吸を整えると、一度大きな深呼吸をして、円卓の方へゆっくりと近づいた。

ウシオの背中に姿を隠しながら、不安げについて行く白雪。

ウシオは地面に転がっていた白雪の椅子を起こし、白雪をそこに座らせて——白雪は、ウシオに対して驚くほど従順だった——何か二、三言白雪の耳元で囁いたが、白雪は分かっているのか分かっていないのか相変わらず不安そうな顔つきで辺りを見回していた。

その間中、ウシオの予想外の剣幕にすっかり怖じ気づいた美穂は、泣きそうな顔でその場に立ちつくしているのであった。

「あ、あの……その……」

「何を召し上がったの?」

ウシオはがたがたと震える美穂の顔を眺めながら、そう訊ねた。

「……ワ、ワイ、ワインです!カミリイさんがご用意下さった……」

僕はテーブルにワインが並べられているのに初めて気がついた。それは席の数だけ用意されており、誰もあまり手をつけていない様子だった。——例外として、大河原先輩のグラスだけはすっからかんだった。もちろん、彼が一口に飲み干したのである。

ウシオはテーブルの中央に置かれたワインの瓶を手にとると、銘柄を読み上げた。

「クロ・ド・ラ・ロシュ、82年……良い物なの?カミリイ」

「安物デスよ、ウシオ。コンビニで売ってるテーブルワインとドッコイドッコイの」
カミリイはそう答えた。

「ですって、あなた。ええと……」

「ミ、ミ、美穂です!」

「美穂さん。とりあえずお掛けになったら？」

ウシオの言葉が何か現実的強制力でも持っているかのように、美穂はすとんと椅子に腰掛けた。

「少し頂いてもよろしい？」

「どうぞ、どうぞ！」

ウシオの言葉に美穂が頷くと、ウシオは美穂のワイングラスを手に取り、半分ほどあった中身を一気に胃に流し込んだ。ウシオは、ほっ、と熱い息を吐くと、グラスを美穂の前に置き、ボトルから赤いワインを注いだ。

「お飲みなさいな」

ウシオの言葉にやはり美穂は逆らえず、目の前のグラスを取ると、意を決したように一気に飲み干した。年齢的に当然といえば当然のだが、喉の奥で熱く焼けるアルコールの感触に美穂は大きくむせこみ、しばらくのあいだ地獄のような苦しみを堪えるハメになった。

ようやく息の整った美穂が改めてテーブルの上に視線を落とし、ぎょっとした。ウシオがまたグラスにワインを注いでいるのである。

「あ、あの……！」

「遠慮なさらず」

断ろうとする美穂の言葉を断ち切るように、ウシオはそう言った。

美穂はヤケクソになってもう一杯、グラスの中身を喉奥へ流し込み、そして、同じように激しくむせ返す。美穂の頬は既に真っ赤になっていた。

「どう？」

ウシオは美穂に訊ねた。

「た、大変美味しゅうございます……！」

「本当に？」

「は、は、はい！」

美穂が息も切れ切れにそう言うと、ウシオは嬉しそうに笑った。良く見ればウシオの方も最初の一杯でほんの少し酔いが回っているらしく、そばかすの乗った頬がピンクに染まっているのが見て取れた。

ウシオが優しい顔つきでゆっくりと美穂に顔を近づけると、美穂は必死に作った薄ら笑いでウシオの顔を見つめ返す。――先ほどカミリイの言った、同性愛者、という言葉を思い出し、僕はふいにどきまぎしてしまった。大河原先輩はとても楽しそうな顔で二人を見ていた。

ウシオは美穂の耳元に、そっと囁いた。

「嘘つき」

と、ウシオは言った。

「……不味いでしょ、こんなの。私は大嫌いだわ……！」

ウシオはそう言って、美穂の手を無理矢理引っ張って彼女を席から立たせた。きゃっ、と小さい悲鳴をあげる美穂を引きずるように、ウシオはつかつかとホールを横切り、奥に佇む小さな鉄の扉へと向かって歩き始めた。美穂はどうしていいか分からず、ウシオに手を引かれながら、ちらちらと円卓の方を振り返るが、誰もウシオを止めようとする者はいなかった。

ばたん、と扉が閉まり、ウシオと美穂は姿を消した。
そして、しばらくの沈黙。

僕はその間、呆気にとられて、カミリイや大河原先輩、黒ロリたち、そして白雪の顔をきよるきよると眺める事しか出来なかった。

「……乱暴な女だなあ」

そう言うと、大河原先輩はワインのボトルを引っつかみ、自分のグラスにどぼどぼと注ぎ込む。僕は彼のマイペースさが羨ましかった。

「あの、さっきの話の続き……」

僕は気になって訊ねた。

「ウシオさんに連れて行かれた、Iさん……地下室でどうなってたんですか？」

カミリイはこっちを見て、オー、と小さく呟いた。

「Iはね、ウシオの玩具になってたノ」

と、カミリイは言った。

「玩具？」

「エエ、玩具。ほとんど半裸の状態で、太い縄でウツケツツするぐらい肢体をしばられて、顔にはさっき言った、ガミガミ女のくつわが被せられて……体には何度も鞭で打たれた痕があって、全身には無数のダボクの痕が、特に酷い部分は皮や肉まで剥がれ落ちていたワ。床はスペインのトマト祭りみたク、Iの血液で真っ赤に染まって……ロマンチックな話デショ？」

「それじゃもう、露出の高い服は着れねえよな」

と、ワイングラス片手に大河原先輩が平然とそう言うと、カミリイはけたけたと笑った。黒ロリたちもお愛想で笑っていたが、内心は二人の会話……特に、カミリイの話にドン引き状態だったろう。

「あの、冗談ですよね？」

僕が訊ねると、カミリイはほっぺたに指を当てながら「んー」と唸った。

「、頬が青ぶくれになるほどビンタされていた、ぐらいの方がシンピョウセイあったデスか？」

「い、いえ……信憑性とかどうでも良いですから、本当の事を教えてください」

「ダメ」

と、カミリイは悪戯っぽく言った。

「それはウシオとIの二人だけの世界の話デスもの、秘密にシなくちゃ。ソレに、どう

しても知りたいたいなら、イマ地下室を覗けばイイじゃない？」

と、カミリイが言った。

僕は少し戸惑ったが、やはり好奇心に駆られて席を立ち上がろうとしたその時……急に黒口りたちの視線が一斉に僕の背後へ向けられた。

振り返ってみると、そこには、すっかり身綺麗になり、恐らくこの屋敷で借りたのであろう、とても仕立ての良い黒スーツを着込んだ啓一くんが立っていた。

「マア、なんて山本タカト的美少年！」

と、カミリイが立ち上がりながらそう叫ぶと、啓一くんはびっくりして一步後ずさり、訝しげな顔つきでカミリイを見返した。他の黒ロリ達も好奇の目で囁き合い、山本タカト的美少年の登場に浮き立っている様子だった。どうも彼はこういう人たちにウケの良い顔つきらしく、ただでさえ歓迎されていないムードだった僕や大河原先輩は、もはや立場というか居場所というか、そういうものが全く無くなってしまったような気がした。

啓一くんは不審そうな顔つきで黒ロリたちをざっと眺め回すと、円卓の空いている席に（僕の隣に）腰掛けた。さすがにもうゲロの臭いはしなかったけど、今度はスーツに染み付いた防腐剤の臭いがきつかった。——ついでに言うと、啓一くんの登場のお陰で、僕はなんとなくウシオと美穂の消えた地下室へ伺う機会を無くしてしまっていた。

カミリイは啓一くんを引っ張り回すように簡潔に自己紹介をさせた後、ウシオ達が消えたドアを横目でちらっと見て、直ぐに興味なさげにこちらに向き直った。テーブルの面々は誰も言葉を発する事無く、僕はあきらかに居心地の悪い一時を堪え忍ぶことになった。

「……この屋敷はドウ？」

お互いの様子を伺うような沈黙の後、カミリイは僕たち三人に訊ねた。

僕は屋敷の内装やテーブルにつく面々の顔つきを見回したが、あまりに強烈すぎる印象のためか、客人として弁えるべき、[、]ほどほどの、[、]言葉は何一つ思いつかなかった。啓一くんは自分のスーツの臭いを嗅ぎながらしきりに首を傾げていたが、防腐剤の臭いが気になって仕方がないのだろう。

「お前さん、ずっとこんなお化け屋敷に住んでるのか？」

僕が悩んだ客人としてのマナーなんて露ほどにも気にとめず、大河原先輩は持ち前の無神経さを惜しむところ無く発揮する。黒ロリの何人かが顔を顰めたが、カミリイは相変わらず笑顔を崩さない。

「ええ、そうヨ。住んでみると意外と快適ヨ。屋敷は広いシ、執事もいるシ、周りは自然ばかりだから、空気はキレーで、おまけにトツテモ静か」

「駅から遠すぎる」

啓一くんが言うと、大河原先輩は笑いながら頷いた。

「はっはっは。コンビニもツタヤもねえしな」

「ネットがあればドコへでも行けるじゃナイ」

それももつともだ、と僕は思った。

「カミリイ、止しましょう。俗っぽい人たちに私たちの趣味は理解できませんわ。この人達と私たちは違いますもの」

マチルダがカミリイにそう言った。

「違う、だって？」

大河原先輩は皮肉っぽく笑った。

「俺もお前らも同じ灰色ケ原の住人じゃねえか。同じ空気を吸って、同じ自販機でコーヒー飲んで、同じスーパードで同じ特売品買って、同じゴミ捨て場に同じ市内規定のゴミ袋で捨ててんだぜ。いったい何が違うってんだよ？」

「精神的に違うのよ。同じ監獄に閉じこめられても、私たちとあなた達では心に抱えているものが違うわ」

大河原先輩は渋い顔でため息をついた。

「なあ、マチコさん。そんなにこの町に住むのがイヤなら、田舎にでも引越したらどうだ？そうすりゃきつと精神的健康も改善されて、そんな薄気味悪い格好しないで済むぜ。もっとも、てめえにそんな行動力があればの話だが……」

「そんな単純な問題じゃ……ああ、もう！だからバカと話すのはキライ」

マチコさんは呆れてそう言うが、大河原先輩の方は楽しそうに彼女の顔を見て笑うのだった。

「でも、僕は結構好きかもしれないです、この屋敷」

僕が言うと、カミリイは一層晴れやかな笑顔でこちらを見た。

「……お前は本当に礼儀を忘れない奴だよなあ、春日」

と、大河原先輩の皮肉。

「いや、お世辞じゃなくて……嘸みつきますねえ、先輩！だって、こんな屋敷に住んだ日には、毎日が『黒死館殺人事件』の世界ですよ？楽しいに決まってるじゃないですか」

数人の黒口リ達がぐすくすと笑った。

「フランツは私たちと一番気が合いそうね」

エリカが視線を伏せたまま、それでも純情そうにぽつりと呟いた。

「黒死館、って何だ、日野？」

大河原先輩の質問に、啓一くんは、知らない、と一言だけ答えた。

「だよな。マイナーすぎてわかんねえ」

「マイナーで結構よ。大衆性なんて醜いわ」

と、マチルダ。

「別にマイナーが悪いつて言ってるじゃねえよ。大衆性のかけらも無い作品で、みなさんご存じの、なんて言い方すんのはやめろって話。もっとも、さっきそんな風に言ったのは春日の野郎だが……」

「僕は場所を見て言葉を選んだんです。実際、大河原先輩と啓一くん以外のみんなには通じましたよ」

むっ、と眉を潜めて大河原先輩はこちらを睨み付けた。

「ほおー！春日、お前はそっち側へ行くんだな！分かった、分かった。そう言うことなら、俺は日野と仲良くやってるぜ。日野、明日はどの馬を買う？」

「一番倍率の高いやつ」

啓一くんは当たり前のようにそう言った。

「ほら、こいつは俺を裏切らねえ。春日は薄情な奴だよ全く！」

大河原先輩が一人で子供っぽく怒っているのを見て、カミリイを始め、黒ロリ達は一斉にくすくすと笑い始めた。彼がどこまで怒っているのか僕には分からなかったが、先輩はよっぽどの事が無い限り三分後にはけろっと忘れていつもの調子に戻るありがたい人なので（最も、逆にこっちが怒った場合も同じ調子で話しかけて来て疲れるんだけど）、僕はあまり気にしないことにした。大体から、大河原先輩はあんまり失敬すぎるのだ。ただでさえアウェイの空気なんだから、少しは黒ロリ達に譲歩しないと……大河原先輩の態度次第では、僕だって、黒死館殺人事件、じゃなくて、バイオ・ハザード、と言ったはずなのに。

笑いの余韻が収まり、しばらくの沈黙と、二、三のぎこちない言葉のやりとりがあった。テール全体での会話はそれっきり止んでしまった。黒ロリ達は全員、気のあった仲間同士のいつもの会話、つまり、通学途中の電車の中や町中をぶらついてするような身も蓋もない会話を始めたので、僕は屋敷に入ってからずっと張り詰めていた奇妙な緊張感からほんの少し解放されたような気がした。大河原先輩はエリカとウシオについて何かを話していたが、他の話し声に紛れてはつきりとは聞こえなかった。啓一くんはと言えば、彼の事が気になっている数人の黒ロリ達の、さもありがたきたりな質問に、ああ、とか、うん、とか適当に相づちを打ちながら、たまにスーツの臭いを嗅いで難しい顔をして、もう既に家に帰りがたっているみたいだった。

そんな中弛みの空気の中、ふとカミリイの方を見ると、彼女が白雪に向かって何かをぼそぼそと囁いているのが見えた。白雪は左手の包帯の緩みぐあいを気にしているらしく、引っ張ったり、無造作に巻き付けたたりして帯を弄んでいる。カミリイはまるで彼女のお姉さんか何かのように優しく囁きかけ、ゆるんだ包帯をしっかりと巻き直した。お人形に白い包帯を巻き付ける、ブロンド髪の少女。何かアート系の映画のワンシーンのようで、僕はその耽美さに思わず感心してしまった。

外観、内装、ファッション、地下室のアンティーク、そして白雪という白痴少女……要するに、この屋敷はカミリイという少女の美意識によって構築された箱庭世界なのだ。そこにやってくる黒ずくめの客達は、カミリイにとってはやはり、白雪と同じお人形でしかない……それは、僕たち三人も例外では無く、更にはカミリイ自身、その登場人物になりきって楽しんでいるのかもしれない。僕は急に、自分が他人の空想の産物に成り果ててしまったような錯覚を覚えた。——ただ、あるいはそういうのも悪く無いような気がした。「ソウダ！」

突然、カミリイが大声でそう叫ぶと、全員の視線が少女に集まった。

「みんなデ隠れん坊シマショウ！」

何で？と僕は思った。それはこんな薄気味悪い屋敷でいきなり「隠れん坊シマショウ！」なんて言われた場合の当然の反応だと思っし、そもそも隠れん坊自体、いい歳こいてする遊びじゃない。しかし、大河原先輩は「面白そうだな！」なんて息を巻いてバカみたいにやる気満々だったし、退屈を弄んでいた啓一くんもどちらかと言えば乗り気で、黒口りたちも元々カミリイの言うことには全肯定らしく、要するに僕はカミリイの提案に、たった一人で動揺したのだった。

賛成のムードに満足したカミリイが言葉を続ける。

「場所はもちろん、コノ屋敷の中。屋敷の中なら、ドコでも自由に行き来して構いマセン……あ！デモ、ペナルティとご褒美が無ければツマラナイわネ……」

頬に人差し指を当て、んー、と考えるカミリイ。

彼女の提案は、最後の一人になるまで隠れ通した者が、今日一日屋敷の中の人間を全員奴隷として扱える、という、いかにも、貴族的精神、から生まれたものだった。とは言え、鬼は隠れるチャンスが無ければ勝利者の資格も無いので不公平ということで、カミリイはわざわざ地下室に降りてウシオを呼び、何も知らない彼女を鬼にさせる事にした。彼女が地下室へ向かって、僕たちはその間に隠れる事になったが……そう言えば、ウシオと一緒に居るはずの美穂はどうするのだろうか？僕はふと疑問に思ったが、直ぐに忘れた。

屋敷内の構図について何も知らない僕たちは、隠れるというより、むしろ迷い込むといった表現の方が正しいような、手探りの行動だった。いくつものドアを開け、埃だらけの物置やテーブルとカーテンぐらいいしか無い殺風景な部屋、あるいは理解しがたいシユールな絵画の陳列された部屋を次々に訪問するものの、「ここだ！」と思った場所は既に先客が確保していて、彼女たちは疎ましげな顔つきで僕を睨み返すのだ。

そうこうしているうちに、みんなが席を立てて既に十分弱。もう鬼は僕たちを探し始めているのかもしれない。次第に高まっていく焦燥感に、僕は思わず早歩きになっていた。なに、先客と出くわすって事は簡単に見つかっちゃう場所さ！なんて自分に言い聞かせながら、僕はアンテナを全開にして隠れ場所を探し続ける。

僕は考えた。あからさまな隠れ場所、例えば、クローゼットの中やカーテンの裏やごちやごちやした物置の中なんて、真っ先に鬼が探す場所なのだ。ベッドの下のエロ本なんて、「母さん見つけてくれ」と言わんばかりじゃないか。もっと人の虚をついた、盲点となる場所を探さないと……。

言うは易く行うは難し。ちつとも固まらない考えの中で、ふと、僕はたまたま覗いたとある物置の中で、あからさまにヘタクソな隠れ方をしている誰かのシルエツトを発見した。バカだなあ、そんな隠れ方じゃドアを開けた瞬間に見つかるのに……と思いつながらさつさと引き返そうとしたその時、僕はある思いつきのためにぴったりと足を止めた。――ベッドの下やクローゼットの中に人が隠れたって、見つかるに決まっている。砂粒の中の

塩粒を探せっつこ無いのと同じように、人が隠れるには、やはり似たような物の後ろに隠れるのが一番じゃないだろうか？例えば等身大の「お人形」のような……

僕の読みは当たっていた。入り口から丸見えのシルエットは他でもない、カミリイお気に入りのお人形の大きなお人形、白雪だったのだ。白雪と同じこの物置に上手く隠れれば、砂粒の中の塩粒とまではいかなくとも、白雪を見つけた時点で安心しきったウシオがさっさと違う部屋を探す可能性は十分にあり得る。もちろん、彼女がもう一度しっかりこの物置を探し直せば僕は見つかるかもしれないけど、それは彼女が既に屋敷を一回りし、僕以外の全員を捜しきった後なのだ。

「白雪、僕は君の後ろにあるそのデカイ鏡の後ろに隠れようと思うんだけど、構わないかい？」

僕が小声で囁くように言うと、白雪はあからさまに恐怖の表情を浮かべ、首を横に振った。

「別に何をしようって訳じゃないんだ。構わないだろう？」

白雪はしばらくきよろきよろと落ち着かなげに視線を左右に振っていたが、僕が続けざまに「頼むよ」と言うと、仕方なさそうに首を縦に振ったのだった。

怯える白雪の側を通り、のそのそとデカイ鏡の裏に隠れると、僕は自分の勝利を確信した。別に誰かを奴隷にしたいわけじゃ無いし、かといって誰かに奴隷扱いされたわけでも無い。しかし、大河原先輩、石神先輩、あるいは山田さんの言うならば、勝負事は勝ってナンボなのだ。白雪という弱者を踏み台にするのは多少良心が痛むけれど、僕がここに隠れようとも、隠れまいとも、彼女はどちらにしろアツサリとウシオに見つかる運命なのだから、別に罪悪感なんてものは無い。何だったら、僕はただ、自分の機知に酔っていた。

息を殺し、闇と沈黙の中に身を沈める。自分の呼吸、鼓動、耳鳴り、そして、かろうじて白雪の息づかいを感じる以外は、まるで自分の考えている事がそのまま音となって聞こえてくるような、完全に外部からの情報が遮蔽された状態。目の前でちらつく、何の体も成さない光の残像。闇から視線を少し動かせば、半開きになったドアから漏れる廊下の光に照らされた、包帯ぐるぐるミイラ女の白雪の横顔が見える。白雪は心配そうにこちらを覗き、僕と目が合うと、慌てて視線を逸らすのだった。

「だー、畜生！目ざといメガネだなあ！」

早くもウシオに発見された大河原先輩の馬鹿でかい声が廊下に反響し、白雪は、ぎくり、と体を強ばらせた。――大河原先輩ほど勝負好きで、そのくせ勝負弱い人もなかなか居ないだろう。

大河原先輩の大声に怯えた白雪は、不安そうにきよろきよろと辺りを見回すと、ほんの少し体を後ろにずらし、こちらへ近づいた。僕ははっとした。あんまり彼女が僕の方へ近づいて、こっちまで芋蔓式に見つかるなんてのは、ダサすぎるし、勘弁して欲しい。とは言え彼女に向かって「バカ！君が見つかりにくくなったら僕の計画が台無しじゃないか！」

と言うわけもいかず、僕は鏡の後ろで更に身を小さくさせるしかなかった。

「見つかりたく無い、よね？」

僕が囁き声で訊ねると、白雪は、うんうん、と二回頷いた。それはゲームの勝負というよりも、むしろカミリィやウシオに命じられた、隠れなさい、という命令に従う一心で生まれた感情だろう。

「だったら、あっちの布きれの下に隠れると良いよ。ちょうど人が隠れるだけの大きさはあるからさ」

白雪はダンスか何かに被せられた布きれを見ると、今度は、いやいや、と首を二回横に振った。子供っぽくて可愛い草草だけど、状況が状況だけに僕はむかつとした。

「こんな近くで君が見つかったら、僕まで君と一緒に見つかったっちゃうかもしれないんだ。分かるよね？」

白雪は頷いた。

「別にこの物置から出て行けとは言わないよ。そもそも先客は君な訳だし、むしろ出て行くべきなのは僕の方だしさ。でももうウシオは僕たちを捜しに来ているし、今更ここを抜け出してどこか違う場所に隠れるには、ちょっと遅すぎるんだ」

白雪は僕の言葉を聞きながら、じつと僕の顔を見ていた。ふとした拍子に、はらり、と包帯の一部が解けて顔面の露出が広くなる。でも、それでも彼女の顔つきからは意志のような物は一切読み取れなかった。

「だからさ、お利口だから、あそこの布きれの下に……」

と、僕が言い終わらないうちに、彼女は僕の言いつけ通りに布の下に隠れるどころか、更にこちらへ身を振って、ほとんどぴったりと僕に体をつけて鏡の裏に隠れたのだ。恐らく、自分の乏しい判断力では何処に隠れて良いのか分からないから、僕が隠れている場所に来れば大丈夫という安心感に後押しされた行動なのだろうけど……ふいに襲ってきた少年向けハーレム漫画のワンシーンのような状況に、僕の心臓は思わず高鳴ったのだ。――人形とは言え、体温や肉体の柔らかさは人のそれと何一つ違わないし、おまけに……白雪は、見ている分にはとても可愛らしい少女なのだから。

「ば、バカ！あっち行けよ！」

思わずぶつきらぼうな口調になってしまいが、白雪は動じた様子もなく、頑なに動こうとはしない。

「人が二人も隠れられるような場所じゃないよ、ここは！」

僕が小声で怒鳴ると、白雪はまた、ぎくり、と体を震わせて、おずおずと僕の顔色を伺ったが、それでもなおこの場所から動こうとはしなかった。

「ずるい」

白雪がか細く震える声でそう言った。

「ずるい？」

僕は驚いて聞き返した。

「ずるいって、何がずるいんだい？」

白雪は自分の思っていることを文章にして言えるほどお利口さんでは無いらしく、何かを言いかけては言い出せず、もどかしい思いに駆られながらこちらを見るのだった。恐らくは僕が何か、ずるい、事をしようとしているのを肌で感じ取り、全ての印象を、ずるい、という単語に集約したのが精一杯だったのだろう。

「何がずるいのさ？僕は君の邪魔なんて何もしてないよ」

と、僕は当然白雪が困って何も言い返せないのを分かっていたいながら、そう言った。やっぱり僕は、ずるい、のだった。

しかし、「だからって、何が悪いんだ？」と、僕はそう思った。

そもそも、白雪みたいな少女が全く平和に暮らすには、この世の中はあまりにも悪意に充ち満ちているのだ。僕だって、決して肉食獣のような人間じゃない。他人の餌食にならないように最低限の敷居を作って、自分を守る事で精一杯なのだ。

この白雪という少女こそ、ずるい。自分では何も考えず、何の努力もせず、ただありとあらゆる出来事を受動的にしか捉えることをせず……そのくせ、その植物的な美德に惹かれたカミリイやウシオという少女に協力に保護されて生きている。全く、幸せなお人形さんじゃないか！白痴だからって誰にもマジには批判されないのに、ちよつとバカな人間が同じような態度をとれば恐ろしい軽蔑にあらう。その差は何なんだろう？知力の全くない事は、あるいは才能の一つだとも言うのだろうか？

と、僕は白雪の透き通るような瞳に覗かれている事に気づいて、思わずぎくっとしてしまった。まるで鏡のように自分の心が写しだされる、純粹無垢の瞳。僕は慌てて首を横に振って、自分の中に沸いた黒々とした感情を捨て去った。

まあいいさ！と、僕はそう思った。

「いいかい、白雪？」

僕は言った。

「もしこの部屋にウシオが来て、君が見つかったとしても、僕が隠れている事は言っちゃダメだぞ」

「ずるい」

白雪はまたそう言った。

「ずるくなんて無いさ。もし僕が先に見つかったとしても、僕は君の事を黙ってるよ。見つかる方が悪いんだ、見つかってない人間まで巻き込む事はない。そうだろう？」

白雪は良く理解出来ないのか、納得のいかない顔つきで口をへの字に曲げて僕の方を見る。僕はそれに気づかないフリをした。

「でも……それにしても、もし君が最後まで隠れていたとして、君がみんなを奴隷に使う姿なんて、想像できないな。君がもしあのカミリイやウシオを奴隷にして、何を彼女たちに命じるんだい？君はあの二人に、何を願うするんだい？」

僕の質問に、白雪は少し考えて、こういった。

「……私をいじめないでって、お願いする」

僕は思わず笑った。

「いじめる？君をいじめるのは一部の黒口リ達で、ウシオなんてむしろ君の事を庇ってるじゃないか。そんなお願いしたって、彼女たちを困らせるだけさ」

と、僕がそう言うのと、白雪は不安そうに辺りを伺って、包帯の巻かれた自分の左腕を見た。

「……ああ、包帯の事を言ってるのかい？それなら、そんなに気を揉む必要は無いよ。むしろ君にとても良く似合ってるし、僕は悪くないと……」

と、僕が言いかけたその時、白雪は何も言わず、手際悪く、ゆっくりと自分の左腕の包帯を解き始めた。指先から、次第に露わになっていく素肌。彼女の真っ白な左手が二の腕にまで差し掛かったその時、僕は隠れているのも忘れて思わずあつと叫び声を上げてしまっいそうになった。彼女の雪のように真っ白な二の腕には、無数の小さな青黒い斑紋があって、それは映画なんかで見る、ドラッグ乱用者の注射器の痕にソックリなのだ。

「……こ、これは？カ、カミリイがやったのかい？」

こくり、と白雪は頷いた。

「……ウシオも？」

こくり、と白雪はまた頷いた。

「ウシオとカミリイは、君を……いい、いじめて……」

と、僕は言いかけると、頭の中にいくつもの疑惑が立ち上がり、それらがまるで数珠のように繋がっていくのを感じた。

……例えば、白雪、というお人形が、生まれつきのおばかさんじゃなくて、人為的に作られたものだとしたら？彼女の白痴が、人為的に……薬物の乱用によって引き起こされたものだとしたら？そしてそれを行っているのは、ファッシュョンと偽り、注射器の痕を隠すために包帯を巻いた、この屋敷の持ち主の、無邪気で残酷なビスクドールだとしたら……？

もともと物音一つ聞こえない物置の中が、急に、殊更に静かになった気がした。そのくせ、真っ暗闇の中をヒリヒリとした緊張感が包んで、ぞくぞくと肌が泡立ってくるような、眩しいぐらゐの静寂。

ウシオとカミリイが彼女を保護している？……とんでもない！彼女たちに比べれば、例えば僕の、ずる、や黒口リの冷笑なんて、可愛いもんだ。本当に真っ黒な、底なしの落とし穴のように真っ黒な闇で、この子羊みたいな女の子を食い物にしようとしているのは、他ならぬあの二人の吸血鬼……

と、その時、物置の中を、あるいは突然降って沸いた疑惑を切り裂くように、ベートーベンの『運命』の鮮烈な電子音のシンフォニーがけたたましく鳴り響いた。僕も、もちろん白雪も、ぎよつとして身を竦ませて、僕は慌てて自分の携帯を取り出し、どのボタンを押したのかも分からず着信音を止めた。

誰かがどたとと廊下を駆け抜ける、ポルターガイストのような騒音。耳ざとく着信音を聞きつけたウシオがこちらに駆けつけたのだろう。僕は携帯をマナーモードに切り替えると、煮えくりかえるような憤りを感じながら、新着メールをぶち開いた。——一体、こんな最悪のタイミングにメールなんて送りつけてきたバカは誰だ！

『最近マジで太ってきたかも。。ヤバイ！><』

送信者 山田ちなみ

勝手にぼちゃってる！

と心の中で怒鳴ったのと同時に、僕たちの隠れる物置のドアが乱暴に開かれた。どنگりメガネの吸血鬼がやってきたのだ。

ウシオはせえせえと息を切らしながら廊下の光を背に物置の中を睨み付けていたが、鏡に隠れきっていない白雪を見つけると、はっと驚いた後、すぐに疑惑の表情を見せた。

「白雪……？あなた一人？」

ウシオは落ち着いた、地の底からすくい上げるようなトーンで訊ねる。白雪は僕の方をちらっと見たが、僕が必死に首を横に振ると、戸惑いを隠さぬままウシオと僕を交互に見て、あたふたと返事に窮するのだった。

「……そう、誰かいるのね」

当然のようにウシオは感づく。

「カミリイ……かしら？」

白雪は首を左右に振る。

「……他の子？じゃあ、エリカ？……エリカでしょ？じゃなきゃ、一体……」

と、ウシオは言いかけて、ぎょっとした。白雪の左手の包帯が剥がれ、青黒い注射器の痕がむき出しになっているのに気づいたのだ。

「……白雪……！ちょっと、それ……ダメじゃない！」

ウシオは言った。

「人前で……あれほど……包帯を解くなって……じゃあ、そこに隠れている人に……見られた？見られちゃったって事なのね？……ダメじゃないの、全く！……ぜえ……」

彼女は苦しそうに何度も息継ぎをしながらそう言った。全速力で走ってきた彼女の息づかいが、じよじよに落ち着くばかりかだんだん酷くなっているようだった。

「嫌な予感……したのよ……隠れん坊だなんて……バカね、カミリイも……白雪を一人にするなんて……私は……私がいればそんなの、許さなかったのに……好き勝手して……！イヤになっちゃうわ、あのきちがい女！」

「そんな風に言われルのは心外デス！」

毒づくウシオの背後に、いつの間にかカミリイが立っていた。ウシオは苦しそうに顔を歪めながら、端から見ている僕がぎくりとするほどのもの凄い勢いでカミリイの方に向き直った。

ウシオは荒げた呼吸の間を縫うように言葉を発した。

「カミリイ！あなた、ぜえ……あなたの……お馬鹿な……ぜえ……遊びの……」

「What？」

とぼけたカミリイに、ウシオは更に恐ろしい形相に変わった。

「あなたの、お馬鹿な、遊びのせいで……また、誰かに、見られちゃったわ！」

「何ヲ？」

「見られてるのよ……、吸血[、]の痕が……！」

「ワタシには関係アリマセンが、ナニカ？」

楽しんで首をかしげ、とぼけたと言うよりもはや挑発的ですらあるカミリイの態度。一方ウシオはみるみる悪化していく容態とこみ上げる怒りに前後も分からない様子だった。

「関係……無いだなんて……あなたに、玩具[、]を用意してあげてるのは……誰だと思ってるのよ……この、恩知らずの……ヘンタイ女！」

ウシオの乱暴な言葉づかいにカミリイはまた心外そうな顔をした。

「利害関係はオンナジじゃないデスカ？ワタシが白雪の血を用意する代りニ、アナタはアナタのサークル内で口実を作ってワタシに玩具を用意スル……最も、ワタシの玩具はお遊戯の為だし、アナタは命に関わる事なのですカラ、最初から釣り合う天秤では決してアリマセンが……」

ふふふ、とカミリイは笑った。

「ソレに、見つかったのナラ、またバラしちやえばいいジャンナイ」

白雪は心配そうに二人を眺めながら、ぶるぶると震えて自分の左腕を押さえている。僕は僕で状況がさっぱり飲み込めず、あるいは彼女以上にテンパっていた。

「どうでも……どうでもいいわ、そんなこと……血を……血を頂戴！白雪の血を……あれがないと……ぜえ……わ、私……また発作が……！」

ウシオは顔色を真っ青にして壁に背を置き、息も絶え絶えそう言うのと、カミリイは満足そうな表情で物置の中を覗いた。

「ジャ、早くソコのお馬鹿さんを連れて地下室へ行きまシヨ」

ウシオとカミリイは二人そろってこっちを見た。

「さっさと……出てきなさい！……クソガキ！」

ウシオの恫喝に、僕は思わず背筋を伸ばした。白雪の不安そうな顔がちらつく。

「出てこないなら……こっちから……ぜえ……行くわよ……」

と、ウシオがふらつきながらこちらへ向かって来ようとしたので、僕はこれ以上彼女たちの機嫌を損ねないためにも、立ち上がる他なかった。

「ぼ、僕です！春日です！」

つんのめりそうな勢いで立ち上がった僕を見て、カミリイはしばらく、きよとん、とした表情のまま立ちつくしたが、やがてすぐにいつもの悪魔的な笑みに戻ると、僕の顔を見ているいろいろ思案するのだった。ウシオは顔中を汗びっしょりにして、辛そうにこっちを見ていた。

「まさかフランツだったとはネ……」

両手を後ろに回し、つかつかとこちらへ近づいてくるカミリイ。

「お人形相手に、何をシテタのかしら？」

「してない、何もしてないよ！」

僕は頭の中からひっつき出すように、ほとんど無意識にそう言った。つかつかと、こちらに間合いを詰めるカミリイ。

「本当ニ？」

「本当だよ！その……白雪とか君らのことは……良く分からないけど、一切黙って置くから……だから、心配しないでいいよ！」

「へエ……」

ぴたり、と僕の目の前で足を止めたカミリイ。

「僕には……その……本当に、君らになんの事情があるかなんて、さっぱり……」

カミリイが後ろに隠していたスタンガンが僕の腹部に噛みついて、突然カーテンでも引かれたように目の前が真っ白になると、僕は意識を失った。

次に目を覚ましたとき、酷い頭痛と息苦しさに僕は思わず顔を顰めた。朦朧とした意識の中、全身をぶつとい縄で鬱血しそうなほどパイプ椅子に縛られ、おまけに口元にゴム製のギャグを突っ込まれていると気づいたのは、目を覚ましてから一分ぐらい経ったあとだった。

ようやく意識に理性の光が灯り始めた頃、僕は自分の居る部屋を見回した。薄暗い白熱灯の明かりが照らす、赤煉瓦の壁に囲まれた薄汚れた物置だ。棚には普通に日常生活を送っている上ではまずお目にかかれない、アンティークが陳列されていたけれど、それらが拷問器具であると悟るのに前知識なんてものは必要無かった。ただ、その内のいくつかは使用方法の良く分からない、もし博物館に並んでいればガラスケースの前でしばらく考え込んでしまうような器具がいくつかあった。

僕は隣に誰かの気配を感じて、そちらに目をやった。――さっきウシオに連れていた美穂という少女が、下着だけのあられもない姿で同じように縛られ、やはり同じくギャグを噛まされていたのだ。目には大粒の涙がにじみ、表情は不安一色に染まっている。男としてあるいはなかなか気色の良い格好だったのかも知れないが、悔やまれるのは僕にそんな余裕が無かったことだ。

地下室の奥からウシオが出てきた。さっきまで死にかけていた様子は微塵もなく、彼女は口元を血で真っ赤に染めて、けろっとしている。彼女はいくらかばつの悪そうな顔つきでこちらを見ると、ぴったりと足を止め、なにか諦観のようなものの混じったため息をついた。

「心因性のぜんそくなのよ」

ウシオは言い開きをするようにそう言った。

「思春期の初め頃に発症した病気で、他人の血を……それも、白雪のような子の血を吸わないと酷いぜんそくの発作が出るの。汚れた魂を浄化する行為なのよ。黒く薄汚れた魂を、

白雪という、混じりけのない無垢な魂で浄化しなければ、私の肉体は腐った魂に腐食されて……」

「腐食されて、ボロボロになって朽ちてシマウ。まあロマンチックですコト！」

カミリイがウシオの陰からひよっこりと顔をだした。ウシオは憎々しげな目つきでカミリイを睨むと、もう一度僕と美穂の顔を眺め、何事もなかったかのように僕たちの間を通り過ぎ、そのまま階段を上っていった。僕と美穂は必死で彼女の後ろ姿を目で追ったが、カミリイが咳払いをすると、磁石のように視線をそちらへ引っ張られた。

「春日クン」

カミリイは言った。

「アナタ、白雪に何を吹き込んでいたノ……？」

カミリイの作られた笑みの向こう側で、何かがどす黒く光ったような気がした。僕は必死に、何も吹き込んでなんていやしないと訴えかけたが、ギャグを囁まされた口元で涎を垂らしながらふご言っただけだった。

「モット、ハッキリと」

僕はもう一度言い開きに挑戦してみたが、やはり言葉らしい言葉は一言も発する事が出来なかった。

カミリイは、ふふふ、と笑って奥の部屋に視線をやった。

「……白雪は誰にもワタサナイワ。アレは私の所有物ですモノ……ワタシの白雪を……ワタシの世界を崩すのは、ワタシの屋敷ではトテモトテモ重い罪なのヨ。ねえ、ミホ？」

美穂は、うんうんうん、と激しく何度も頷き、カミリイに同意した。余裕のない、必死の媚びへつらい。しかしこの際、見苦しいぐらい媚びる方が人間らしい気はした。

「ミホ、アナタはともお利口だワ」

と、カミリイは優しく言った。美穂は愛想笑いを浮かべる。

「なのに……なぜ、白雪の鼻を摘んだノ？」

ぎくり、と表情を硬くする美穂。

「アナタは分かかって過ちを犯す人なの？春日クンは、分からずに過ちを犯しタシ……いいたい、ドッチが悪いのカシラ……？」

カミリイは腕を組み、難しい顔をして、うーん、と考えた。

「……やっぱり、コッチよネエ」

カミリイが僕の方を指さした瞬間、僕の背中に冷たい汗が一筋流れた。

「分かかって犯す過ちハ、悔い改めるコトができるケド、分からずに犯す過ちハ……自覚が無いモノ！ホラ、バカは死ななきゃ治らナイって言うじゃナイ？」

カミリイは言い終えると、勿体ぶってつかつかと地下室の中を歩き、浮き立つような仕草で柵から――女の子がコンビニでおやつを選ぶように――選んだアンティークをテーブルの上にならずらと並べ始めた。

「コレハ、突き刺す道具」

と、カミリイはフォークを手にしながらそう言った。確かに、僕にもそうにしか見えない。

「コレハ、潰す道具」

と、カミリイは変わった形のペンチを手にしながらそう言った。

「コレハ、焼き付ける道具」

と、カミリイはまだ火のついていない焼きごてを僕に見せた。

「コレハ、身を固めテ動けなくスル道具。一番楽そうだがケド、半日で死にたくなっちゃうワ」

と、カミリイは小さな鉄の小さなかこのような物を、ぱんぱん、と叩きながらそう言った。

「ドレが良いかしラ……ねえ、ミホ？」

美穂は泣きそうな、引きつった笑顔を浮かべて首を傾げた。

「ア、そうそう。春日クンが、終わった。ら、次はアナタだから、待っててネ。ダツテ、過ちは同じ過ちデスものネ」

狂わんばかりの勢いで叫び出す美穂。ギャグを囁まされた口からは言葉を何一つ発する事が出来なかったが、彼女が人生で学んできた限りの全ての哀願の言葉を並べ立てている事は容易に想像できた。

カミリイは心底楽しそうな顔つきで美穂の頬を撫でる。美穂は強ばり、必死にカミリイから目を背けるのだった。

これは何だろう？と、僕は思った。何かがおかしい。でも、この子にはそれが当たり前らしい。心の歪みで培われた、人としてあるまじき姿。あるいは社会という名のグラデーシヨンの、極めて薄暗い部分で生まれついた真っ黒い獣……こんな綺麗な顔をして、その面の皮の下には、いったいどんな悪魔が潜んでいるというのだろうか？

「……ソウソウ。あのヒノとかいう人……」

カミリイは思い出し、僕に向かって言った。

「……あの人、とてもワタシに似てるワ。自分で分かるモノ。あの人の目は、ドウしようもない、ロクでなしのニヒリストの目ですよ！他人を信じる信じない以前にナニカの、事象、のようにしか感じズ、自分の感覚すら遠い世界のデキゴトのようで……起こるべきデキゴトにマシンのように、対処している。ダケの、生ける屍のような人。ソウスベキ」という言葉だけが彼の全ての哲学で、全ての行動指針なのヨ。だから、自分は何処にも居ないシ、誰でもナイ……あるいはミンナそうなのかもしれないけれど……彼はそれが特別ケンチョなノ。少なくとも、ワタシはそう。だから、出口を探すノ。少しでもスリリングな、ギリギリの場所へ逸脱して」

カミリイは、潰す道具、を手にして、残酷な、しかし、どこかやるせない顔つきを見せた。

「……単純なものデシヨ？生きる為に、殺すノ。ここ地球において、最も原始的なルールに

則って」

と、その時、やや急ぎ足で誰かが地下室への階段を下りてくる音が聞こえた。そのこなれた足跡はやはり僕が期待するようなヒーローのものではなく、カミリイの執事のセバスチャンだった。

彼は僕と美穂の無様な姿など気にも止めず、ただの障害物然と側を通り過ぎると、何かをぼそぼそとカミリイの耳元で呟いた。カミリイは満足そうな笑顔で頷く。

「ソウ。そうネ。二、三時間この二人で遊ブから、後片付けはヨロシクね……エエ。樹海でも、海の底でも、ブタのエサでも、ナンナリと……」

僕は、とにかく落ち着くように自分に言い聞かせた。上の階には大河原先輩もいるし、啓一くんもいる。いざという時は彼らがヒーローのように駆けつけてくれるはずだ。なぜなら……根拠は無いけれど、僕の人生はいつだってそういう悪運強いものだったし、この上に居るのは他でもない、あの「日野啓一」なのだ。人一倍神様に愛されている彼が、もし僕が死んでほんの少しでも悲しいと思うなら……僕はきつと助かるはずなんだ。じゃなきゃ、僕は……強いては、啓一くんは、神様に愛されていないって事になる。そんなのウソさ！じゃなきゃ……IDEAの王って言うのも、エツトウへの息子って言うのも、全部ウソになるじゃないか、畜生！

僕は心の中で叫んだ。

（やるならさっさとやれってんだ！どうせ逃げも隠れも出来ないんだ、僕は逃げも隠れもしないぞ！）

セバスチャンは僕の方を見ながら、再びカミリイの耳元で何かを……と囁く。

いつも不敵な笑みを浮かべるカミリイが、その時ばかりは表情を曇らせた。

「……ハ？」

と、カミリイは呆れたように言った。

「……スチュワート。アナタ、何様の積もりでそんな事を……自分の立場を弁えてモノを言いなさい！……エエ、それは知ってるワ。それハとても可哀想な事だとは思うケド、でも、だからと言って……」

カミリイはセバスチャン……スチュワートと呼ばれた執事と、しばらく小声で何か言い争っていた。その間、セバスチャンはしきりに僕の顔を見て、執事にしてはいささか傲慢な顔つきでカミリイに何かを訴えかけ、彼女の言葉に食い下がり、対するカミリイは彼の意見などハナから全く相手にするつもりが無いようにきっぱり撥ね付けるのだった。やがて議論もエスカレートし、あわやどちらかが大声で怒鳴り始める程になった時、カミリイは大きなため息をつき、ちらっと僕の顔を見て、しぶしぶ頷いたのだった。

「ソウネ……十分、十分だけなら春日クンを貸してあげるワ。十分あればイケるでシヨ？」
セバスチャンは毅然とした面持ちで頷く。

イケる？

イクって、何処に？

「春日クン、予定が変わったワ」

申し訳なきように、カミリイが言った。どうやら、本当にそう思っているらしい。

「実はネ……このスチュワートはネ、つい先月、付き合ってた。彼氏」と別れて……トテモ寂しい思いをしてるノ。長かったわよネ。まだ祖国に居た頃からだカラ……五年？十年？……トニカク、それはモウ、大恋愛、と呼べる関係だったダケに、最近の彼の落ち込みぶりったら無くて……ワタシも主人として見過ごせないノヨ。だから、十分だけスチュワートに『お尻を貸してあげてほしい』ノ。ほんの十分だけで良いから、よろしくお願いネ」

カミリイが言い終わると、セバスチャンは至って真摯な顔つきで僕の顔を見た。

僕はさっきの美穂みたく、我を忘れて叫びまくったが、もちろん「もごもご」といううめき声と共に涎を垂らしただけだった。

話が違うぞ！と、僕は思った。

フオークは？ペンチは？焼きごては？こんな素敵なおじさまに犯されるぐらいなら、僕はいつそ、死を選ぶ。それが僕の本音で……いや、もちろん、もつと言うなら、どっちだってイヤだ。どっちも？それも違う。もうお化け屋敷も地下室も拷問器具もホモ執事も、何もかも、イヤだ。さっさとこんな場所から抜け出して……家に帰って、このクソ暑いスーツを脱いで、ベッドに転がりこみたい。それが本音だ！啓一くんとつまらない事をだべって、大河原先輩にいじられて、藤枝の天然に笑って、山田さんに怒られて……そういう当たり前の日常に戻って、当たり前前に生きていたい。ここは僕が来る場所じゃ無かった！僕はそりゃ、少しは変わった人間かもしれないけれど、それでもこんな目に遭うほど人の道を踏み外してるわけじゃ……

気がつけば、僕はロープの代りに手錠をかけられ、セバスチャンに無理矢理——彼は見た目以上にもの凄い腕力の持ち主だった——壁に押しつけられていた。あつという間の早業でベルトを下ろされ、必死で掴んでいたトランクスもひん剥かれてしまう。カミリイと美穂が頬を染めてこちらを見る。気づけば、奥の部屋から白雪も覗いていたが、彼女は僕が、何か乱暴をされている。以上は何も理解していない様子だった。セバスチャンの指先がいやらしく僕の胸板をまさぐると、寒気と鳥肌が全身に一気に走った。

「強烈ネ！」

カミリイが他人事のように言ったその時……

僕のポケットの中だけたましく、**運命**、の着メロが鳴り響き、美穂と、白雪と、セバスチャンと……カミリイ以外の全員が、ぎくり、とした。

件の隠れん坊で、既に見つかってしまった大河原先輩や啓一くん、他の黒ロリたちは、元のホールの円卓について雑談に興じていた。まだウシオに見つかっていないのは白雪とカミリィ、そして僕の三人だったが、既にその三人がゲームから脱落し、地下室で拷問ごっこに興じていることなど、彼らは知るよしもなかった。

「でもよ」

と、大河原先輩は啓一くんに切り出した。その顔は至って真剣で、冗談の片鱗も見受けられない。

「いくら姉弟とは言え、高校まで別々に暮らしてたんだから、ほとんど他人なわけだろ？ その……なんだ。年頃の男女がだぜ？ 一つ屋根の下に住むって事になると……いろいろあんだろ、やっぱし」

一人の黒ロリのひよんな質問から、啓一くんの特異な境遇が皆に知れると、場は彼とその姉の話でもちきりになっていた。一同の視線は啓一くん一人に集中した。

「期待するような事は何も無いよ」

と、啓一くんはそっけなくそう言う。大河原先輩は首を横に振って、馬鹿馬鹿しげに笑った。

「いいや、ウソだね！ ココロみてえなべっぴんが壁一つ隔てて隣に寝てるんだぜ？ 暑くて寝苦しい夜なんかは、なにかこう、悶々とする事だつてあるんじゃないやねえか？ 姉ちゃんの下着をこっそり盗む事だつてたまにはあるんじゃないやねえのか？」

「しないよ、バカ」

「するしないを訊いてるんじゃないやねえよ。そんな風に思うことだつてあるだろ？」

「俺は変態じゃない」

「何言つてやがる。これは正常な男子の発想だ。そういう意識の全く無い方が変態だぜ！」
大河原先輩の意見に、数人の黒ロリ達（おもしろ半分で）賛同すると、啓一くんは面倒くさそうな顔つきで椅子にもたれ掛かるのだった。

「日野、お前はココロの事がキライか？」

「いや……好き」

啓一くんの言葉にきやあきやあと色めき立つ女子たち。中には、低俗な連中だこと！ とでも言わんばかりにむっとり顔をしかめる子もいたが、それでも話題のイモータルな香りが彼女ら特有の美意識をくすぐり、耳を傾けないわけにはいかないのだった。

啓一くんは慌てて言葉をつけたす。

「好きだから、変な事をして傷つけたく無い」

「じゃあやっぱり傷つけるような事を考えてるんだな!？」

「だから、そんな間柄じゃない」

「間柄なんてどうでもいいんだよ。年頃の男女、つまり、動物としての本能がだな……」

「実の姉に性的感情を抱くのが動物の本能なのか？」

「実の姉じゃねえだろ!」

「少なくとも、俺はそう思ってる」

「そうやって逃げんだもん。つまんねえの!」

と、大河原先輩はガキつぼくふて腐れて、ワインの代りに出された紅茶に手を伸ばした。黒口りたちはどうあってもこの話題を打ち切りたくないらしく、何か秘密の取引みたくこそそそとささめき合って、中には二、三の質問を啓一くんに投げかける者もいた。啓一くんはその度に「自分の姉だぞ?」とか「変態には興味がない」とか言って冷たくあしらうのだけど、もはや彼の意味はそっちのけで、誰一人として信じる者はいなかった。

「じゃあよ、今度ココロに同じ質問をしていいか?」

と、大河原先輩。

「何を?」

「お前の事を男として見れるか、って」

啓一くんは少し考えた後、何かを一度言いかけて口を開いたが、結局また難しい顔に戻って「うーん」と唸るきりだった。

「あの……私も一つ質問良いかしら?」

と、エリカが言った。全員の視線が彼女に集まった。

「あなたとお姉さんを隔てている壁は、姉弟、という言葉よね。もし二人の間にそういう言う不思議な出来事が無ければ、あるいは、そういう事、もあり得たって事じゃ……ちょっとキミ、日野くん。聞いてよ。聞きなさいよ」

エリカが言葉を言い終わらないうちに、啓一くんは自分の耳を塞いで「あーあー」と喚き始めたので、一同は失笑を浮かべたのだった。——最も、啓一くんが頑なにそう言う態度を取るのが、逆に彼女たちの感心を煽っているのだろうけれど。

「バカな野郎だぜ。お前、どうでもいいけど早く山田か藤枝どっちにするかきちんと選べよ。惚れられるってのは、タダじゃねえんだぞ。責任があるんだぞ、責任が」

大河原先輩が珍しく気の利いた事を言う。しかし、もうそのころには啓一くんは何もかも考えるのが面倒くさくなって、携帯なんかを覗いてすっかりしよげこんでしまっているのだった。

「……春日はまだ見つからないのか?」

ふと思いついたように、あるいは誤魔化し半分に、啓一くんはそう訊ねた。

「奴こそモノホンの変態だからな。自分を隠すのは得意なのさ。隠者だし」

大河原先輩がそう言うのと、啓一くんは少し考えて、「そうかもな」とあっさり納得するのだった。

そして例の地下室では、^{運命}のけたたましい着信音が、僕の貞操に一時の猶予を与えてくれていた。このベートーベンは携帯に最初から入っていたもので、僕自身は特に好きでも嫌いでもなく、何と無しに設定していたものだけど、あるいはこれを機に好きになるかもしれないし、はたまた大嫌いになるかもしれない。どちらにしても、なんの感慨も無しに聞くにはあまりに強烈な印象が植え付けられてしまったのだ。

カミリイは僕のズボンを拾って中から携帯を取り出すと、当たり前のようにメールを閲覧する。

「家の中でマデ下らない日常会話？こういうのって、何が楽しいのかシラ？」

カミリイは携帯を操作しながら、こちらを見向きもせず訊ねる。どうせ山田さんがさつきみたいなのりで駄メールを送ってきたんだろうけど……何も楽しい事なんてないさ、単なる暇つぶしなんだから。

一方セバスチャンはと言えば、興を削がれたというか、拍子が抜けたというか、さつきから戸惑いを隠せぬままに僕とカミリイの方を交互に見ながら、どうしたものか様子を伺っていた。彼を狂気（僕はあえてそう言う）に駆り立てたのは、この地下室と、そしてカミリイの醸し出す異質な空気に後押しされた為であって、カミリイがそっぽを向いている間のセバスチャンにはそこまでの度胸は無いのだ。

携帯をじっと睨み付けるカミリイの顔つきが、じよじよに面白い玩具を見つけた子供のような晴れやかな笑顔に変わっていく。メールの内容に何か彼女の心を打つ文章があったのだろうか。

「……面白い、面白いワこの人……」

と、カミリイは言った。

「ネエ、春日くん。この人、どこに住んでるノ？ドンナ人？女の子ヨネ？呼びなさいヨ、ここへ！この人、ワタシ、欲しくなっちゃっター！ねえセバスチャン、バカみたいな事してないデ、このメールの送り主ヲ……」

「失礼ですが、お嬢様」

、バカみたいな事、というカミリイの言葉に憤りを覚えたセバスチャンは、カミリイの方を向いて自分の行為の正当性を証明しようとして、ムキになって反論した。彼は僕の襟首を引っつかんでは居たが、それもカミリイへの反論に夢中ですっかり肩手間になっていた。

セバスチャンの油断に気づいた僕は、思わずぎくりとした。そして、ほとんど条件反射的に、バネが弾け飛ぶように、彼の顔面に向けて後頭部で思いっきり頭突きをかました。人を殴って傷つけた経験なんて一度も無いけれど、この時ばかりは相手への手加減や思いやりなんて考えは全く無かった。

予想以上のクリーンヒットに、目の前に何か電流のようなものがちらちらと走る。セバ

スチャンの方は鼻血を撒き散らしながら、ふらふらと二、三步後ずさり、美穂の膝にずっしり座り込んでしまった。美穂はもちろん、微動だに出来ない。

僕はすぐ近くの棚にナイフがあるのを見ると、脇目も振らずにそれを引っつかんでカミリイ達にちらつかせた。ナイフは丈が長く、中近東の処刑人が罪人の首を撥ねるときに使うような、ほとんど曲刀と言って差し支えのない大きなものだった。

「むごむごもご！」

と、僕は叫んで、慌てて両手を後頭部に回し、ギャグを外した。

「う、う、動くな！全員動くな！」

カミリイは鬼のような形相でこちらを見て、ちっ、と舌打ちする。セバスチャンはふらふらと立ち上がったが、不意打ちが余程効果的だったのか、朦朧とした意識の中で僕とカミリイを交互に見るのだった。僕は全員が動かないように睨み付けながら、手錠をかけた両手で急いでトランクスをはき直した。

「ズボンをこっちへ放り投げろ！」

カミリイが僕のズボンをこっちに放り投げ、やはり、僕は急いでそれをはき直す。

「携帯も！それと、手錠の鍵も！早くしろ！首根っこ撥ね飛ばすぞ！」

僕は自分自身が何を言っているのかも、もし彼らが僕の言葉を無視して襲いかかった時にどうするつもり（本当に斬るのか？）なのかも分からず、自分でも驚くぐらいの早口で捲し立てた。興奮しすぎて、頭が完全に混乱していたのだと思う。

それは傍目から見ても尋常じゃない様子らしく、あるいは僕が本当に自分を刺しかねないと思ったカミリイは、両手を組んで仁王立ちしたまま何も言わずに、じっとこちらの様子を伺うのだった。

僕は奪い返した携帯に着信していたさっきのメールをちらつと横目で覗き、うんうん、と二度頷いたが、内容を吟味する判断能力は全く無く、ただ文字の羅列を視界に写しただけに終始した。――僕の純潔を救った命の恩人のようなメールだ。帰ってじっくり読もう。

「馬鹿なことはおやめなさい」

僕が手錠の鍵を外している間、セバスチャンが諭しつけるようにそう言ったが、どういうわけか彼の言葉は酷く僕の神経を逆撫でした。僕は手錠を外すとナイフを真一文字に振って、セバスチャンを威嚇した。セバスチャンは慌てて後ずさり、美穂もカミリイも思わず目を丸くするのだった。

「バカはお前だろ、このビョーキ野郎！もう少しで僕は……僕は……ああ、考えただけで鳥肌が立つ！」

僕は外した手錠を地面に叩きつけて、彼らの方に蹴り返した。

「舐めた真似しやがって！僕は本当に……本当に怒ったぞ！」

錯乱した頭の中でもそれだけは分かった。僕は本当に怒っているのだった。

僕はカミリイを睨み付けた。カミリイは相変わらず腕を組み、傲慢な顔つきでこちらを睨み返していたが……しかし、いつもの余裕の笑みは無かった。傷つける事には散々慣れ

ているようだったが、自分が傷つけられる事には慣れていない。むしろ、そんな出来事が起こるなどと、微塵も予想していなかったのだろう。自分の世界で自分が傷つけられるなんて、そんな事が起こるはずがなかったのだ。

それでも自身の病的なまでに高い自尊心から、彼女は気丈にこちらを見返していた。青い綺麗な瞳の奥には確かに怒りが宿っていたが、それも今や脆い堤防のようで、ふとした拍子に堤防は決壊し、恐怖という津波が溢れかえろうとしている。彼女の足下をよく見ると、部屋の端からでも小刻みに震えているのが分かった。

ふと、僕は混乱した頭の中で、むらむらと黒いものが沸き上がってくるのを感じた。それは梅雨時の雨雲のように分厚く僕の心を覆い、人としての正常な心を真っ暗闇に染めていくような気がした。それが、カミリイの影響か、この地下室の持つ霊気なのか、あるいはこの屋敷自体にそう言ったものがあるのか、それは分からない。百キロオーバーのスピードで高速道路を突っ走るような、寒気がするほどの興奮。その行き先が行き止まりだったら、尚良いだろう。

僕が前に一步踏み出すと、カミリイは体をびくつかせ、強ばらせた。

「……ドレスを脱げ！」

カミリイを始め、セバスチャン、そして美穂までが耳を疑う。

「ドレスを脱げ！死にたいのか!?!」

「なにを馬鹿な……」

「セバスチャン！お前が喋る度に、僕は爆発しそうになるんだ！黙って突っ立ってろ！」僕の怒声が地下室に響き渡ると、セバスチャンはカミリイの方をちらっと見て、しぶしぶ黙り込んだ。

「さっさと脱ぐんだ！」

カミリイはしばらく僕とナイフの切っ先を交互に睨み付けていたが、組んでいた両手を、ぶらん、と一度宙に垂らすと、やがて諦めたようにドレスの肩の部分に手をかけた。彼女はそこでまた一度戸惑ったが、直ぐにそのまま前にかがんで一気に頭の上からドレスを脱ぎ捨て、目の前に放り捨てた。

カミリイは黒い編み上げのコルセット・キャミソールと、やはり黒のレースのパンツだけの格好になり、片手で自分のお腹を抱えるように突っ立ち、視線を背け、恥辱に堪えるように黙って唇を噛みしめていた。

「コルセットも脱げ！」

何か征服感のようなものに後押しされるように、僕はカミリイに命令した。理性の仮面が剥がれ、むき出しになった自分自身を感じる。――その時は、僕はそんなむき出しの自分が醜いだなんて少しも感じなかったのだ。

カミリイは一瞬、ぎよっとしてこちらを見たが、その目つきには既に反抗の色は無く、ただただ従順に僕の言葉に従うのだった。彼女は脱ぎ捨てられたコルセットをドレスの上に乱雑に投げ捨て、膨らみかけの乳房を両手で隠し、見ているこっちが哀れになるほど

ガタガタと震えていた。一瞬赤くなつた顔色は直ぐに真っ青になり、視線は一カ所に止まる事無く忙しなく部屋中を動き、潤んだ瞳からは今にも涙があふれそうになっていた。セバスチャンは無念そうに目を背け、美穂は呆気にとられた表情で僕の方を見ている。

「ついでにそれも！」

「……ドレ？」

「決まってるだろ、パンツだよ！」

カミリイはぎよつとして、慌てて首を横に振った。

「僕の言うことが聞けないのか？」

カミリイは恐る恐る上目遣いに僕の顔を見ると、僕に全く引く気配が見られないのを悟ったのか、片方の手は胸を隠したまま、まるで奴隷のように僕の言葉通りもう片方の手をパンツにかけた。

「……なんでコンナ……」

何かを言いかけて、口を噤むカミリイ。

言いたいことがあるなら言えよ！と僕が言おうとしたその瞬間、彼女は思い切つて、一気にパンツを足下までずり下ろすと、そのままぺたんと床にお尻をつけて慌てて膝を抱えた。羞恥心に顔中を真っ赤にし、全身をガタガタと震わせ、ついにはその美しい両目から大粒の涙をぼろぼろと零すのだった。

「……お遊び……ほんのお遊び、だったノニ……なんでコンナ、ワタシ……」

言葉にならぬ言葉を、途切れ途切れに口にするカミリイを見て、勝ち誇つた僕は大笑いしそうになったが、それもほんの一瞬だけの話で、次の瞬間、僕は自分でも驚くほど気分が沈みこみ、次第に自分のしたことを冷静に考え始めるのだった。

「……カミリイ。君、いくつ？」

僕は訊ねた。

「十四……デス」

「ふーん……」

平静を装いつつも、僕はがっくりするほど後悔した。

年下の女の子にナイフを突きつけて素っ裸にさせるなんて、人間のやることじゃない。

「……グスツ」

カミリイの涙をすすする音の哀れっぽさと悲痛さに、僕は思わず首を横に振った。

僕は白雪の方を見た。彼女は相変わらず、僕のやっている事を何一つ理解していない様子だったが、何か乱暴をしている事は僕やカミリイの表情から察したようだった。壁の陰に隠れて、こちらに出てこようとはしない。

「白雪」

と、僕が声をかけると、白雪は、ぎくり、とした。

「こんな悪魔の住む連中の屋敷にいたって、ダメだ。僕と一緒に外へ行こう」

白雪とカミリイは僕の言葉を聞いて、真っ直ぐにお互いの視線を交わした。普段なら高

圧的な態度で白雪を逃がす事なんて許すはずがないであろうカミリイも、今は捨てられた子犬のように震える事しかできなかった。もちろん、カミリイが何を言ったところで、僕は白雪の意思以外は絶対に認めないつもりだ。

「白雪、どうする？」

僕が改めて訊ねると、白雪は怒られる事を承知したような、おどおどとした上目遣いでこちらを見た。

「……ここにいる」

と、白雪が呟く。僕は驚いた。

「ここに……残るのかい？このままいじめられ続けても？」

こくり、と頷く白雪。

「ダツテ……白雪は、この屋敷の外では暮らせないんデスもの……」

素っ裸のカミリイが、弱々しい声で言った。浮いたあばら骨が、妙に痛々しい。

「ウシオも白雪が必要ダシ、ワタシも白雪が居ないト……」

「君に白雪が必要だって？玩具扱いするだけなのに！」

「……ワタシは、ワタシはそんな積もりじゃ……それに、アナタだって……」

「僕？僕が何だって言うのさ？」

「アナタだって、悪魔デスよ……ワタシをこんな格好にして、ソシテ……」

カミリイは言いかけて、口噤んだ。こんな格好にされて、彼女は僕にどうされると思っているんだろう？もちろん、僕はどうするつもりも無かった。ほんの一瞬ブレーカーが飛んだだけの話で、もう僕の頭の中には理性の光が灯っているのだった。——文明の光の当たっていない、暗黒時代の文化か！——と、僕は拷問器具を眺めながら先輩の言葉を思い返すのだった。

「……生憎だけど、僕は君らの仲間じゃない。確かに、根っこの部分じゃ悪魔かもしれないけど……それでも、仮面、を被る術ぐらいは心得てるんだ。そもそも、悪魔じゃない人間なんてどこに居るってんだ？居るとすれば、それはその白雪だけさ！この子がここに残る決断をしたのも、知らぬ仏より馴染みの鬼……いや、知らぬ鬼より馴染みの鬼、ってわけできさ！」

僕は皮肉っぽく笑うと、白雪の顔を見た。彼女は壁に半身を隠しながら、僕の方をじっと見つめている。

「白雪、僕は君の決断を尊重するよ。それに君を何処に連れ出したものか……僕にはさっぱり見当つかないや。それが本当に幸福な事なのか、不幸な事なのかも。決断、出来るんだもの、僕は君の事を、バカ、だなんて言いやしないよ。自分の在るべき場所がきちんと見えているのだから。むしろ屋敷の外こそ……本当に、めくらの疲れたバカばかりさ！」

僕は吐き捨てるようにそう言うと、ナイフをスーツの背中に差して、急いで階段を駆け上った。最後にちらっと地下室を上から見下ろして見たが、素っ裸の外人少女、包帯女、ズ

ポンを半分おろした執事、パイプ椅子に縛り付けられてギャグを囁まされた少女がそれぞれこちらを見上げて、僕は改めて自分がこんな場所にいたことに首を傾げるのだった。ほんの数秒前の出来事が、昼寝の時に見る悪夢のように、朧気で、遠い世界の出来事のように思える。

本当に、僕はこんなところで一体なにをやっていたのだろうか？
早くウチへ帰らないと。

大河原先輩がアクセルを踏むと、屋敷の窓から漏れる明かりはどんどん小さくなっていった。啓一くんは僕の隣で眠そうに目を擦り、大きなあくびを一つする。ゲロまみれの助手席は、今は空席だった。

なんだって急に帰りがるんだよ。勝手な奴だなあ……と大河原先輩はぼやいていたが、彼は僕が地下室でどんな目に遭って、どんなことをしてきたかを知れば、きつと言葉一つ思い浮かばないに違いない。あるいは、大笑いするだろうか？でも、それを説明するには、今の僕はあまりにも疲れすぎているのだった。

僕は携帯を開いてさっきのメールを見た。カミリィを一時的に子供に戻し、結果的に僕を救うことになった、例のメールだ。

送信者 藤枝 百合花
件名 藤枝です

本文 『最近、将来の事を考えるといろいろ悩んじゃいます。このまま勉強を続けるのか、あるいは社会に出るのか、はたまた夢を追うのか……でも、夢って何？詩作はほんの趣味で、先があるなんて考えた事も無いし……結婚？結婚は……考えると、一番疲れます、いろいろと。それに、そんなことを他の男の人に相談するなんて失礼だよ。失礼と思うことが自惚れ？自惚れてなんていけないけど、自分をどれだけ蔑視したところで、将来への道は自分で決断して進まないといけないし……そんな事を考えてると、ぐるぐるぐるぐる考えがループして、この間の下町迷路を思い出しちゃいます。

ここでポジティブなスイッチを入れるべきだし、入れようと思えば何とか入れられるんだろうけれど……でも、それは思考する事から逃げて、ただ盲目的に逃げているだけのような気もする。でも考えすぎちゃうと、本当に、雁字搦めになって身動きが取れないよ。

春日くんは、なにか確信めいたものを心に抱いて生きられる？、自分が何者だ、って言い切れる？そう確信するには早すぎる年齢？でも、将来は待っちゃくれないだもん。結局、焦燥感に突っつかれて逃げるみたいに走るしかないのかな？』

僕は半分ぐらい読んだところで、疲れて携帯を閉じてしまった。十分ぐらい車に揺られ

た頃、啓一くんは爆睡しているし、大河原先輩は無言のまま運転しているの、退屈になったともう一度携帯を開いてメールを読んでみたが、やっぱり文章は何一つ頭に入らず、途中の改行にすら到達出来ないまま、僕は読むのをやめてしまった。

僕は何も考えず、指先の思うままにぼちぼちと文章を打ち始めると、それをそのまま藤枝に返信した。

本文 『いま僕の背中にはでっかいナイフが差さってるんだけど、もし困ったら可愛い藤枝にこれを貸してやるよ』

送信。

それから十分ぐらいいして、藤枝からメールが返ってきた。

本文 『意味わかんないよ〜〜』

ははははは、と僕は大笑いすると、啓一くんはびっくりして跳ね起き、僕の方を見た。そして訳も分からずにつられて小さく笑うと、頭を窓ガラスにもたれさせて、また静かな寝息を立て始めた。

意味なんて無いよ、意味なんて。

と、僕は心の中でそう思った。

こんな世の中に意味なんてあるもんか。

(完)